

の外來語を聞知してそれを傳へたものだと思はれる。

蒙古語とトルコ語とに於てはかく巫を呼ぶ名を異にしてゐたとして、*kam* と *saman, sama, saman* 等とは同一語であるかどうか、即ちトルコ語とツングース語とに於ては一致するものかといふに、自分はこれをも別々の系統のものとするべきであらうと思ふ、もし音韻の上からのみ論ずるならば、一般の現象として *k* の音と *s* もしくは *sh* の音とが相轉することについては固より異論はないし、ツングース語自身に於てもその例はあり (*Kunta, kunta, Sunta* 等がともに *deep, profund* の語なるが如く)、トルコ語とツングースとの間に於てもまた此の現象は認め得られる (トルコ語の *kuda=Verbindung* はツングース語の *sadaun* に當るが如く)、それで *kam* なる單綴音の語か *saman, sama, saman* 等二綴音の語に延びることは誠に有り得べきことと思はれる、それで音韻の方面からは積極的に此等の同一語なることを否むべき理由はないが、自分は此等の兩語はそれ々の國語として別々の語根から成立して居る言葉で、従つて音韻の類似は偶然の現象と認むべきものだと思ふのである。

Schrader 氏によると印歐語では、巫もしくは巫術魔法 (*Zauberer, Zauberei*) といふ言葉は「知る」 (*wissen, kennen*) といふ言葉から生じたものが多いとのことで、氏は之が爲に多くの例證を擧げて説明を施して居るが、一々尤もの次第である、自分は此の見方を以てツングース語の *saman, sama, saman* などを解きたいと思ふ。滿洲語ツングース語では「知る」といふ動詞は *sa (mbi), sa (m)* であるが、此の語幹に *man* が加はつて名詞になつたものが即ち *saman* であらう、グレベンシュチコフ氏に據ると *goi (mbi)* 即ち「女に愛を示す」といふ動詞から *goiman* 「情郎」「阿郎」なる名詞が出来て居るといふのであるが、*saman* といふ名詞の成り立ち方も全く之と

北方民族の間に於ける巫に就いて